



名古屋いのちの電話



写真 文珠幹夫

石仏

— 晩秋

吉野 弘

うしろで

優雅な、低い話し声とする。

ふりかえると

人はいなくて

温顔の石仏が三体

ふっと

口をつぐんでしまわれた。

秋が余りに静かなので

石仏であることを

お忘れになって

お話などなさったらしい。

其処だけ不思議なほど明るく

枯草が、こまかく揺れている。

詩集「感傷旅行」より



生き生きと生きる

犬山・寂光院山主

まつ だいら じつ いん
松 平 實 胤

死ぬ人と死なない人

「こんなことなら、死んだほうがましだ。」と、騒ぐ男に限って死んだためしはない。

「くやしーい、死んじゃうから。見てなさい、死んでやるー。」と、わめき散らす女はまず死なないものだ。

概して、本当に死を選ぶ人は、ひっそりと静かに死んでいくらしい。現代は、このように死を急ぐ人が多くなったとか。勿論、古今東西、自ら死を選ぶ人は多かった。殊に戦後のどさくさ、食うに精一杯の貧しい時代には、一家心中も珍しくはなかった。

しかし、今は時代が時代である。豊かで恵まれて何不自由ない時代に、死を急ぐ理由は甚だ疑問である。

寂しさは死を招く

先日、あるお年寄りが、次のようなことをおっしゃった。

——朝起きて食卓につく。「おばあちゃん、おはよう」、「おばあちゃん、行ってきます」と言われる日はなんとか一日が我慢できます。

しかし、朝起きて食卓についても、「おばあちゃん、おはよう」とも言われない。「行ってきます」とも言われない。「そこに居るか」とも言われない。そんな日は無性に寂しく、一日がとてつもなく長く感じられます。——

何不自由なく暮らし、家族に囲まれて一見幸せそうでも、寂しいお年寄りが多い。いや、登校拒否、入社拒否、帰宅恐怖症、……とにかく現代は豊かな時代ではあっても疎外された人々の何と多いことか。

一番大事なもの

人は誰でも、「無視される・邪魔にされる・こけにされる・忘れ去られる」ということを極端に嫌う。「誰からも相手にされていないのではないか」という自分の存在に疑問が生ずると大事な命を捨てる人だっている。早い話が、命よりも大事なものがある。それは自分の存在感、面子（めんつ）ではなかるうか。

四つの願い

では面子が保たれ、人が生き生きと前向きに生きられるにはどうしたらよいのか。

実は赤ちゃんからお年寄りまで、とにかく生きている限り、潜在的に願っている願いが四つあるようで、これを四求（しぐ）という。

——愛されたい。ほめられたい。お役にたちたい。認められたい。——

この四つの願いが、その人なりに満足されていれば、人は生き生きとしているという。

愛されているというのは自分にちゃんと目が向いている、関心が向いているという満足感である。ほめられると誰でも意欲を向上させる。役たらず・無能……これほど人を傷つける言葉はない。そして自分の存在が認められる、これほど快いことはない。

思いやり

私も無意識のうちにこの四つの願いに生きる。立場をかえれば皆それぞれ、その四つの願いに生きている。とにかく豊かな人間関係こそ幸せの基本である。お互いがお互いの四求を満足させ合おうという思いやり、これがあったらどんなにいいかと思う。

「およそこの世に存在するもので無駄なものはない。必ず存在価値、存在理由があって存在する。」という目を戴けたら、どんなにいいかと思う。役に立つか立たないか、意味があるかないか、という物差しを捨てて、人をお互いに受けとめる広く豊かな視野が戴けたらどんなにいいかと思う。

経歴

昭和21年 名古屋市に生まれる

昭和48年 名古屋大学大学院印度哲学科修了

現職の他、京都智山専修学院講師、名古屋市民大学講座、中日文化センター、毎日文化センターを始め各地各方面の講師を勤める

中日新聞中日懇話会報（月刊）に「やすらぎ説法」を連載
中日新聞日曜版心のページ「ともしび」等の執筆・「自然の心」（大崎辰雄写真集・共著）

生がいの再ぎんみ

—日本自殺予防シンポジウムの北海道大会に出席して— 長岡 利貞

近くの山々ようやく紅葉がせまり、吹く風もいちだんとさわやかさをました札幌の街。ここで第16回の上記全国大会が開かれました。私は笠井事務局長と同道、昨年の名古屋大会を思いだしながら、会場の札幌市教育文化会館に向かいました。

私たちの参加のねらいは3つありました。ひとつは、名古屋で提起した問題がどのように展開されているかを知ること、ふたつは今回の大会の運営になにか新様軸が編み出されるにちがいない、それを学ぶこと、それから、北海道いのちの電話の2つのセンター（札幌・旭川）の方々と交流を深めること、でありました。

開会式には齊藤友紀雄氏（東京いのちの電話）の世界の自殺予防の現況をふまえた感銘深い挨拶がありました。大会の運営はほぼ名古屋大会を踏襲したもので、午後は4つの分科会に別れた研究協議。第1分科会は青年にとって生きがいとは、第2分科会は働きざかりの生きがい、第3分科会は老年期の生きがい、第4分科会は障害を持つ人の生きがい、をそれぞれテーマとしました。「生きがい」という、外国語にはない、日本に独特な表現ゆえに、提言の内容も多彩でした。私は第1分科会に出席しましたが、提言者のひとは、二年前に自殺未遂の体験のある若い学徒の体験に基づく考察でした。貴重な証言を聞かせていただけたことを感謝するとともに、この大胆な企画をされた関係者のご苦心が偲ばれました。

午後は在日朝鮮人二世の作家、高史明氏による「深いいのちを見つめる」という基調講演ではじまりました。氏はひとり息子の真史君を1975年7月17日、自死で失くされた体験をもつ方です。夫人岡百合子氏とともに遺稿を編んで「ぼくは12歳」（ちくま文庫）とされました。氏はこの講演の中

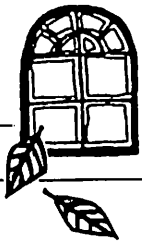
で、まず、近代の日は生んだ宿命としての人間不信を問題としてとりあげられました。そして自死した子をもつ親として、子どもの感性豊かな世界を理解していなかったことを、「ぼくは12歳」をテキストとして、しぼり出すようなことばで語りかけ、訴えられました。底のない悲しみを話すことの苦しさが、ひしひしと伝わってきました。そして、そこから生きがいとはなにか、いのちとはなにかを語られ、深い感動をおぼえました。大会の主題にまことにふさわしい講演でした。（大会の会内容は「月刊生徒指導」1992年2月号に掲載）

基調講演に引き続き、各分科会の報告をふまえたシンポジウムが行われました。印象的であったのは手話通訳者による巧みなコミュニケーションでした。見事に思わず会場から拍手がおこりました。全体を通じて、13年間にわたる北海道いのちの電話の蓄積の豊かさを感じ入りました。参加者が700名にも及んだのはそのひとつの証しです。お昼休みには、いのちの電話紹介の手づくりのスライドが上映されました。美しいモーツァルトの名曲とすてきなナレーションで、活動の模様と実況が手際よくまとめられ、参考になりました。わが名古屋でも考えてみてはと思いました。なお来年度は、北九州市で開かれることが発表されました。

懇親会は、札幌センターの方々の心づくしの、オール北海道名産によるグルメの会となりました。地元の皆さんが、土地の産物の味を誇らしく説明されることがとてもうらやましく思いました。大会を万端ご準備いただいた北海道いのちの電話に心からお礼を申し上げます。そして、このシンポジウムが広く社会に理解され、支援され、展開されることを期待したいと思います。

〔 梶山女学園大学人間関係学部助教授 訓練委員 〕





窓



仮称「愛知電話相談研究会」発足

昨年の秋、名古屋いのちの電話が中心となって開催した「自殺予防シンポジウム名古屋大会」のテーマである「いのちをまもるネットワーク」を発展させるために、1991年6月から愛知県内にある各種の電話相談機関に呼びかけ、仮称「愛知電話相談研究会」を始めました。

現在愛知県内には公的・民間団体・個人の行っている電話相談と名の付くものがかかなりあると思われませんが、その実態ははっきりとは分かっていないのが現状です。

「愛知電話相談研究会」では月1回の研究会をかさねて、電話相談の持ついろいろな問題点の解明と電話相談機関相互のネットワーク作りをめざしています。現在参加している会員の関わっている電話相談機関は次の通りです。

- ・こころの電話（愛知県教育サービスセンター）
- ・ヤングテレホン（愛知県警察本部）
- ・子ども、家庭110番（愛知県中央児童相談所）
- ・婦人悩みごと電話相談（愛知県婦人相談所）
- ・こころの健康電話（愛知県総合保健センター）
- ・思春期電話相談（愛知県医師会）
- ・愛知県医師会難病相談室（愛知県医師会）
- ・豊田、加茂医師会難病相談室（豊田、加茂医師会）
- ・老いと病のための相談室（東別院青少年会館）
- ・婦人悩みごと電話相談（岐阜県婦人相談所）
- ・名古屋いのちの電話（愛知いのちの電話協会）

1992年秋には、全国電話相談研究集会を開催することになり、今後は他の電話相談機関への呼びかけと全国大会の準備におお忙しの1年になりそうです。

フォーラム

6月29日（土）開催

1部 事業報告

2部 講演「ボランティアとは」

西澤信正理事

アカデミックなごちそう

おいしいカレーライス、心のこもったデザート、バザーと相談員との交わりを楽しんで間もなく、アカデミックなごちそう（講演）を頂き心身共に満足であったが、少々消化不良を起こしてしまう程、西澤氏の講演は世界的な視野でボランティア活動とは何か？、それを支えるものは何かについて熱弁を奮われた。改めて、今の生きている時代を考えるにあたっての幾つかの歴史的節目を示され、その一つ一つの出来事を通して、人間は何故殺し合うのか、どうして愛し合えないのか、生命の根源、環境の問題、地球号の新しい進路について全人類が意識を変えていく必要がある事を学んだ。世界中があちこちで火砕流を起こしている。日本も又、火砕流を起こしている。マグマは何なのか、バブル経済、バブル現象におかされている高慢な大人達、“チャエンドホヤ”の時代に育っている子供達となかなかおもしろい日本の今の時代の表現であった。

私は今、ボランティア活動が出来る事を感謝し、意識を変える一助として素直に喜びたいと思った。電話相談の中で、火砕流でなくマグマを見つめていこうと思った。ちょっと、アカデミックだったかしら？

(K・S)

第13回いのちの電話全国研修会 福岡大会に参加して

去る9月26日から三日間、全国研修会が九州福岡の地で「いのちをこほぐ、生きる私、生かされる私」をテーマに開催され私も微力乍ら参加をさせて頂きました。この名古屋からの参加は私を含めて僅、二名で淋しい限りでしたが全国の各電話センターから北は旭川南は沖縄までの総勢474名が馳参じたこととなります。第一日目の博多全日空ホテルの開会式場では、いのちの電話相談活動を、日夜献身的に続けておられる全国の仲間、精鋭達の異様なまでの熱気が会場狭しと伝わってくるのを感じました。基調講演があり、作家の森崎和江氏がテーマ「生きること書くこと」の中で「自分が朝鮮で生まれ朝鮮の風土で養われた少女期までの自分と、17才になって母国、九州筑豊の地での女学校時代から現在に至るまで、自分が嘆き悲しんだ時、励ましてくれた近所の人達のお陰で現在こうして書物を書かさせて頂いているが、いつも心が泣いているのが実感である。一番辛らいつと思ったことは社会時間と体内時間に人間は両足をかけているから上手くいかない時は泣いた。そうしながらも歴史という動かしようのない時空の中で生きていることに感謝し耐えることができるのは、あの人この人のぬくもりの故だと思う」と話されています。人生の波濤を幾回となく乗り越えてきた氏だけにお話の説得力がありました。特に女性の方々には感動された部分が多かったのではないのでしょうか。夜にはミニ交流会がフリートーキングの場として開設され各センター間の情報交換の場、又新たな出会いの場として自由に利用が出来ました。第二日目の分科会は各々の志望するグループに分かれ研修しましたが、私は相談員の自己理解と成長をめぐるグループ「コーラーから学ぶ」を選択し朝の九時から夕方五時まで中身の濃い研修を受けさせて頂くことが出来ました。この世には無駄な命は一つもない事を全員ともう一度確認し合い、そして相談には自分が幸せになること、この幸せがあれば周囲の人々も影響を大いに受けやすいし、人間は人と向き合って生かされるのではないかと自分なりに解釈もしました。最終日は全体会でパネルディスカッションが実施され、あるパネラーが「電話には限界がある。面と向い合って話す方が「生身」がある。がしかし電話という媒体を使って心の眼で見える特徴を生かすところにあると思う」と話されました。そのあと閉会式があり、私にとってこの参加が少なからずも、いのちの電話とのかかわりを通して自らの生きざまを顧み、喜びや悩みを分かち合える機会となったことを有意義に感じました。(N・G)



ご援助ありがとうございます

1991年5月1日より9月末日までに下記の方々から暖かいご支援をいただきました。一同深く感謝いたしますと共にご報告申し上げます。(順不同・敬称略)

社会福祉法人愛知「いのちの電話」協会
理事長 相馬 信夫
財務委員会

賛助会員(A)

傍島茂夫	笠井康助	福田昌豊	川村敏夫	内河武二	伊藤孝一	石黒友二	加藤慎二	柳原佳枝	古西雄一	寺重井野	岩野	原○波田	智沢理彰	津直・理	子次惠爾	西○波志	田○亀志	史治敏信	郎子彦夫	梶徳会志	原留沢村	俊澄史喜	寿翠三江	星荒惣三	島川卜村	和浩良とま	空一郎夫	平岩愛高	岡田知橋	義圭暢坎	和子磨美
福川村木	鈴木河	藤孝一	黒藤友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
川村敏	鈴木河	藤孝一	黒藤友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
内河武	鈴木河	藤孝一	黒藤友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
伊藤孝	黒藤友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	
加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	石黒友	加藤慎	柳原佳	古西雄	寺重井	岩野	原○波田	智沢理	津直・理	子次惠	西○波志	田○亀志	史治敏	郎子彦	梶徳会	原留沢	俊澄史	寿翠三	星荒惣	島川卜	和浩良	空一郎	平岩愛	岡田知	義圭暢	和子磨	

賛助会員(B)

浅井千代	日本福音	児玉光	平田たづ	河津百	鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ
日本福音	児玉光	平田たづ	河津百	鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ	
児玉光	平田たづ	河津百	鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ		
平田たづ	河津百	鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ			
河津百	鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ				
鈴木木	菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ					
菊田よ	坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ						
坂本康	小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ							
小尾雅	山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ								
山波正	宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ									
宮内英	神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ										
神田本	廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ											
廣野普	野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ												
野幸雄	普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ													
普久雄	久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ														
久雄	梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ															
梶島山	原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																
原し田	久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																	
久づ恵	江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																		
江子子	道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																			
道根三	家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																				
家戸上	良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																					
良佳謙	枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																						
枝子茂	神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																							
神森貝	戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																								
戸沼崎	一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																									
一嘆恭	子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																										
子一子	初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																											
初岩中	井田北	英邦昌	夫美イ																												
井田北	英邦昌	夫美イ																													
英邦昌	夫美イ																														
夫美イ																															

点滴

テレビドラマなどのように「愛している」という言葉を私たちはめったに使うことはない。「好き」だとか「嫌い」という言葉はしょっちゅう使う。気軽な言葉だからだ。勿論、言葉は状況によって意味が変わるから、好き嫌いが重大な意味を持つこともある。だが言葉は、時代や民族によって異なるが、それぞれその本来の故郷とも言うべき場を持っている。

好き嫌いとは好みの問題で、はたからとやかく言っても仕方のないことにかかわっていることが多く、それだけのことなのである。しかし、良い好み悪い好みということもあり、それ程簡単ではない面もある。

長い間の、時には代々にわたってつちかわれたものが身についた文化として現れる事もあるからだ。

「愛する」という言葉は、元来、はるかに重い意味を担っている。嫌いなものを愛するわけにはいかないが、

賛助会員(〇)

田中あさ子	尾浦浅	関下野村	静桂三智	枝子稔枝	金森高木	金子橋村	範一光悦	子眸美彦	林足植	郁克貞次	子己郎智	藤竹太江	谷原田口	道と美	代よ恵勇	片古矢満	山谷田野	悦篤正	子昭二子
小谷川公喜	〇花小川	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
石田喜代子	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
多和田いみ子	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
矢吹三千代	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
秋田芳江	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
相馬貞キ	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
鈴木島	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
高橋栄	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
斎藤木	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
鈴木輪	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中
水野	〇北條野	〇粟田東	〇坂出口	〇服部野	〇矢野田	〇安田林	〇加藤	〇加藤	〇鈴岡家	和足鉦	〇小田島	〇杉堤	〇佐々木	〇小栗	〇近藤	〇松前	〇堀田	〇安増	〇富中

法人賛助

〇シワ製作所	セキセイ(株)	〇津内工業所	〇オチアイネクス	岡田工業(株)	名南精密製作所
トヨタ・ピスタ名古屋	萩原電気(株)	〇萬勇	〇メイテック	堀江金属工業(株)	川北電気工業(株)
愛知三菱自動車販売(株)	〇高津製作所	千代田火災海上保険(株)	〇竹中工務店名古屋支店	〇みどり造園	〇高木製作所
新東工業(株)	理研産業(株)	糸重(株)	アラコ(株)	藤木海運(株)	〇三璃モールド
〇杉浦製作所	名古屋証券取引所	〇丸栄	名証正会員協会	〇フジキカイ	

寄付金

佐々木さと子	中村三郎	楠 忠雄	内川正邦	牧岡志乃	太田令子
宗教法人薬師寺	日本キリスト教団南山教会婦人会	梅澤晴子	梅澤晴子	長沼てる子	中谷啓子
山崎百合子	菅沼恒子	高橋郁子	野村敏子	高須瑞枝	R・Aメリット
千波留美子	法用 涉	川口つや子	生川和子	西村 清	中川鋪子
三井とみ恵	〇服部真理子	〇小林米子	八木一江	〇山田信子	秋田芳江
〇岩田電算機会計事務所		西沢信正	幼き聖マリア修道院	内川正邦	〇阿部宏遠・貴美子
加藤雄一	谷口江利子	〇榎本勝子	近藤直枝	〇足立恵吾	〇中外
森久つえ	寺井かね子	在日大韓キリスト教名古屋教会婦人会	水野道子	日本キリスト教団瀬戸永泉教会	〇中辻三千代
日本キリスト教団婦人会連合		〇名古屋共栄証券(株)	朝倉夏雄・建子	木村常子	〇西尾和子
梶浦和由	〇神谷 忍	〇竹内哲子	〇やろう会代表梶野寛幸	知多市立看護専門学校	〇辻巻 真
加藤みゆき	高田邦彦	〇やろう会代表梶野寛幸	金子紀子	〇山下機械(株)	〇松永誠之
藤吉康司	〇河村敏子	金子紀子	〇水野嘉子	〇沼野篤代	五十君和子
柳沢幸子	真宗大谷派養念寺	博野明子	薬師寺柿本大真	津田とみ子	

〇印の方は1991年度賛助会員募集運動に協力し入会して下さい下さった方々です 感謝をもってご報告申し上げます

好き嫌いの問題ではない事柄を指しているからだ。「愛」を「大切にすること」と日本語に訳している辞典がある。これは「愛」と「正しさ」とのつながりを見事に示している的確な訳ではなかろうか。「正義は裁き、愛は宥す」とは、昔からよく言われることで、また事の一面をよく示しているとも言える。だが、そこから愛を正しさに対立するものと考えすることは重大な誤りであろう。この危険は多くの場面で私たちの生き方を損っている。このように解された愛に好みが重なると、正しさは基だ影のうすいものになってしまう。「戦争に正しい戦争などというものはない」、この頃よく新聞で見かける無責任な言葉だ。好み、愛、正しさなど、人間の生の基本を形づくっている事柄の微妙な関わりは、簡単に解明できないが、事の本質をあらためて省みなければならないと思う。(宮内璋)

名古屋いのちの電話日誌

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 6月3日 仮称 愛知電話相談研究会 | 26日 三委員長会 |
| 6日 財務・運営合同委員会 | 30日 第6期養成講座 ロールプレイ開講 |
| 10日 三委員長会 緊急電話研修会 | 8月5日 仮称愛知電話相談研究会 |
| 〃日 訓練委員会 | 23日 全国訓練担当者研修会 (於、京都) |
| 17日 運営委員会 | 9月4日 近畿・東海統計担当者会 |
| 27日 財務委員会 | 5日 財務委員会 |
| 29日 フォーラム、財務・運営合同委員会 | 9日 運営委員会、訓練委員会 |
| 7月1日 仮称 愛知電話相談研究会 | 18日 仮称 愛知電話相談研究会 |
| 6~7日 第6期養成講座 一泊研修会 | 21日 博野明子(旧青木)送別会 |
| 22日 運営委員会 | 26日~28日 第13回全国研修会 福岡大会 |

第4回“街頭キャンペーン”

「いのちの電話を応援する宗教者の集い」が、今年も、10月18日に、栄交差点を中心に、PRと募金活動を行った。これは、より多くの市民の皆様にも、「いのちの電話」を知っていただきたいと願いを込めて、僧職、牧師、修道女等が、宗教、宗派を越えて奉仕しているものです。

賛助会員を募集しています

ご協力をお願いします

いつも資金ボランティアとして会費やご寄付をご支援いただき有難うございます。心から御礼申し上げます。年間1,500万円の運営資金と共に、法人の基金を10年間で1億円積立てる課題を与えられています。会員の皆様の旧倍のご支援と共に、会員増加の運動にもお力添え下さるようお願いいたします。

会費、寄付金は次の様にお願いしております。

- (1) 法人会費 年間5万円以上・10万円
 - (2) 賛助会費 (個人、年間1口)
A 10,000円 B 5,000円 C 3,000円
 - (3) 一般寄付
 - (4) 夏期・年末寄付
- ご自由な金額で結構です

会費、寄付金のご納入は、次の口座にお振込み下されば誠に幸でございます。

- 口座番号 東海銀行大津町支店(普)477029
 ○郵便振替口座 名古屋1-53758
 ○口座名 社会福祉法人愛知「いのちの電話」協会
 理事長 相馬 信夫

私共は社会福祉法人となり、所得税法人税の税法上の優遇措置が次のように受けられるようになりました。従って本協会の発行する領収書は確定申告の折そのまま、寄付金控除の、又、法人の場合は損金に算入の証憑となりますので(損金指定番号はありません)領収書は大切に保管してください。

★個人の場合

確定申告によって、所得税法(第78条1項2項3号)の規定により寄付金控除が受けられます。寄付金額又は、所得額×0.25のいずれか低い金額から一万円を減額した金額=寄付金控除額

★法人の場合

確定申告によって寄付した金額を法人税法(第37条3項3号)の規定により、一般損金算入枠と他にこれと同額枠(従って倍額)の損金算入枠が認められます。

お問い合わせは

本協会 事務局 ☎ 971-5181

【MEMO】

台風の当たり年?。この秋は何度か本土を通過しました。皆様方の周囲に被害の無きことを祈り、被災された方々へ心より御見舞申し上げます。

ご意見、ご感想をお寄せください。また、表紙の詩、窓のコーナー、点滴などへの投稿もお待ちしております。

社会福祉法人愛知「いのちの電話」協会
名古屋いのちの電話

1991. 晩秋

〒461-91 名古屋東郵便局 私書箱 第257号
 事務局 ☎ 052-971-5181
 相談電話 ☎ 052-971-4343

郵便振替口座 名古屋 1-53758
 東海銀行大津町支店(普)預金口座 477029

1991年11月1日発行
 発行人 相馬 信夫
 編集人 広報委員会